

# 先週の回答

## いのちの命の洗濯



「どやって干すんですか？」  
「干す必要はないのや」  
「何ですか？」  
ストロベリージャムをたっぷりぬったトーストを口にしながら姑が、  
「あのなあー、命の洗濯ゆうもんは、洗うんじやないのや」  
「だったら洗濯ではありませんでしよう、お義母（かあ）さま」  
「それが洗濯なんや」  
「何ですか？」  
ズツ、シナモンティを軽くすすって、「あんたら洗濯ゆうと、洗ったっ機にほうり込むってのはるけど」  
「ちがうんですか？」  
「パン、食うか？」

「いただきます」  
わたしは掃除の手を休めて、テーブルについてストロベリージャムがたっぷりのトーストをかじる。朝の日射しが姑の顔のシワ一本一本を光らせている。  
「鬼のいぬ間の洗濯、知らんか？」  
「それ何ですか？鬼って何ですか？」  
「いない方がいい奴のこっちゃ」  
「と、いますと？」  
「しよっちゅー監視してて、口うるさく干渉する奴っちゃや。ま、さしずめ連れ合い、亭主なんかそれがそれや」  
（あんたもや）と、わたし。  
「そーゆーのがない隙にする洗濯や...。つまり息抜きすることや」  
（息抜き、ズツ。鬼のいない間に、ズツと、わたし。



三日後、ドライクリーニング屋のケンちゃん、そーっと音もなく玄関を開ける。小声で「大奥さまは？」  
「お伊勢参り、二泊で」  
さらに小声で「ご主人は？」  
「東北出張、三泊で」  
ケンちゃんは居間に入ってくると、ズボン脱ぎながら、  
「だったら...」  
下着を脱ぎながら、あたし「鬼のいぬ間の」  
「仙台新幹線故障で、急遽出張中止になった」  
主人がガラッと襖を開けた...

